「お話」の表現研究

柴田奈美

はじめに

子どもの表現活動は、子どもが自ら表現したくなるような気持ちに導くことが第一である。『子どもの育ちと保育者のかかわり』(注①)の中で、本吉圓子氏は次のように述べている。

「もう三十年も前になるが、ある母親から『先生には何も言うことがないが、うちの恵子はちっとも歌を覚えてこないんですけど……』と言われ、はっとした。そうだ！　私がうたっていない。早速翌日恵子ちゃんのお母さんに言われたことを子どもたち（五歳）に話し、『今日から先生の大好きな歌をうたうから聞いてね』と恥ずかしいけれど一人で子どもたちの前に立ってうたった。それは戦前の小学校唱歌で、春の小川、夏は来ぬ、海、（中略）など好きな歌だけ一生懸命、毎日うたった。子どもたちから『僕たちもうたいたい』としぜんに声が出て、子どもの好きな歌も独唱、合唱、二部合唱にしたり、本格的な強弱を譜面通りにうたう毎日が続いた。（中略）表現の中でも、歌や楽器を奏でたくなる方法は難しいが、聞くことから、美しい、楽しそう、私もうたってみたい、と心を動かすようにすることが基盤にあることが望ましいのではないだろうか」（傍線柴田）。

文中の「聞くことから」というのは、保育者の声であることが、一番望ましいわけで、そこから保育者と子どもとの間に心のスキンシップが生まれてくる。

ここで、保育者の表現に対する興味・関心の度合が、そのまま子どもに伝わっていく点に注目しなければならない。例えば、保育者が「おはなし」を教材として子どもと関わる前に、まず、保育者自身が「おはなし」を楽しんで読み、イメージをふくらませること、さらにすすんで、「おはなし」を自分で作ってみるという体験をもつことが、子どもに対する共感を深めていくことになると考える。

本研究では、学生にとってなじみ深い「昔話」を土台とし、そこからイメージを自由にふくらませて新しい「おはなし」を創作する、という課題に取り組ませた結果をまとめ、考察したい。

対象　岡山県立短期大学平成三年度入学保育科二年生、四十八名。

講義題目　「国語」

ねらい

①　文章創作の苦手な学生にも書きやすいように、「昔話」から発想させ、自由にイメージをふくらませる体験をもたせること。

②　文章創作の楽しさを味わわせることにより、苦手意識をできるだけ取り去り、創作意欲を抱かせること。

③ 学生の作品を相互に鑑賞させることにより、イメージのふくらませ方の多様さや個性ある表現を味わわせ、創作意欲を高めさせること。

素材（土台となる昔話）

土台となる昔話は、年齢を問わず子どもたちに好まれている「おむすび　ころりん」を取り上げた。そして、学生がイメージを自由にふくらませやすいように、ストーリーも表現も簡略されたものを示した。

学生に示した「おむすび　ころりん」の表現を、次に引用しておく。

おむすび　ころりん（昔話）

むかし　むかし、ある所に、おじいさんと、おばあさんが住んでいました。おじいさんは、毎日、おばあさんに作ってもらったおむすびを持って、山へ木を切りに行きました。

ある日、「ああ、疲れた。どれどれ、お弁当にしようかのう。」と、言いながら、おむすびを食べようとしました。

すると、どうでしょう。おむすびが、ころころと、おじいさんの手から落ちてしまいました。「これまて、まて、まて」おじいさんは、おむすびを追いかけました。

おむすびは、ころころ　ころがって、すっとん　と、穴の中に落っこちてしまいました。

おむすび　ころりん　すっとんとん
ころりん　ころりん　すっとんとん
穴の中から、それは　かわいい歌声が聞こえてきました。
おじいさんはうれしくなってまた一つ、おむすびを穴の中に落としてみました。
おむすび　ころりん　すっとんとん
ころりん　ころりん　すっとんとん
またまた、かわいい歌声が聞こえてきました。
おじいさんは、おむすびを全部穴の中に落としてしまいました。
でもおじいさんは、まだかわいい歌声が聞きたいので、今度はおむすびが入っていた重箱を　穴の中に落としてみました。
あらあら、聞こえてきました、きました。
じゅうばこ　ころりん　すっとんとん
ころりん　ころりん　すっとんとん
おじいさんは、たまらなくなって、どしーんと、こんどはおじいさんが入ってしまいました。
「おじいさん、ようこそいらっしゃいました。」
「おやおや、いったいここはどこかな」
「ハイ、ここはねずみのくにです。おむすびを、たくさんありがとう、おれいにおどりをみせてあげましょう。」
「おもちもついてごちそうしましょう。」
ペッタンコ　ペッタンコ
ねずみのもちつき　ペッタンコ

それつけ　やれつけ　ペッタンコ

ねずみたちは、おどりを踊って見せたり、歌をうたって聞かせたりして、おじいさんと楽しく過ごしましたが、おじいさんは、おばあさんが待っているからと言って帰ることになりました。

ねずみたちは、ひとふりすると、こばんが一枚　ふたふりすると、こばんが二枚　と、歌いながら、おじいさんに、うちでのこづちをおみやげに渡しました。

「おじいさん、私のしっぽにしっかりつかまってください、私がお家（うち）までおともしましょう。」

おじいさんが　ねずみのしっぽにつかまると、アッと言う間に、おじいさんの家の前にきていましたとさ。

（相馬和子他著『お話とその魅力』所収）。

一、学生の作品二例

学生には、文章化の前にすることとして、次の二点を指示した。

① お話を聞かせる対象を想定すること。

② お話の時代、場所、登場人物とその人柄について箇条書きし、登場人物の姿、あたりの様子などを、具体的なイメージとして思い描いてみること。

実践例として、学生の作品を二例、次に挙げる。

〈作品例　①〉　　定廣　雅代

○対象　三歳児

○時代　中世

○場所　ヨーロッパ

○登場人物

おじいさん……とても貧しい、心優しい

ねずみ……逆境にもめげず、楽しく暮らしている。

小鳥……おじいさんが好き

むかし、ある寒い国に一人のおじいさんがくらしていました。年をとっていたので仕事もなく、貧しい生活をしていましたが、一羽の小鳥と楽しく生活していました。

ある日、おじいさんはいつものように小鳥と一緒にパンを食べていました。一口食べ、テーブルの上のパンに手をのばしたところ、なんとパンがなくなっていました。部屋をよくみたところ、隅の方をパンを持ったネズミたちが走っているのが見えました。おじいさんは、

「おやおや、新しい友達ができたようだ」

と、うれしそうに言い、明日の分のパンを持って、ネズミの穴のそばへ近付きました。

すると、どうでしょう。おじいさんは、穴の中へすいこまれるように入ってしまったのでした。

そこでは　大勢のネズミたちがパンを囲んで楽しそうに歌を歌っていました。

パンがいっぱいパンパンパン
パンはおいしいパンパンパン
「なんと、楽しそうだね。」
おじいさんの声に気づいたネズミは、少し悲しそうな顔をしていいました。
「おじいさん、パンをとってごめんなさい。大勢の仲間がおなかをすかしていたんです。」
おじいさんは、それを聞いて言いました。
「それはつらかっただろう。パンでよければ、いつでもとりにおいで。」
ネズミたちは大よろこび。皆でまた歌い出しました。
パンがいっぱいパンパンパン
パンはおいしいパンパンパン
おじいさんも楽しく歌っていましたが、部屋で小鳥が待っているからと言って帰ることになりました。
「おじいさん、どうもありがとう。お礼にこれをもって帰って下さい。」
ネズミが渡したのは、一ふりすると金貨がたくさんでてくるステッキでした。
おじいさんはよろこんでステッキを見ていると、そこはもう、いつのまにか元の部屋になっていました。
それから後、おじいさんはお金持ちになりましたが、ネズミの穴の前にパンを置くことを、ずっと忘れませんでした。

〈作品例　②〉

佐藤　美穂

○対象　小学生中学年以上
○時代　大正元年
○場所　広島県宮島
○登場人物
大下文太（45）♂　働き者・家族思い
花子（42）♀　働き者・やさしい
いい子（18）♀　働き者・しっかり者
もんじゃ（12）♂　働き者・元気
かよ（7）♀　働き者・お兄ちゃん子
オコゼ♂　のんき者
タコ♂　調子者
金魚♀　気がきく

ここは紅葉の豊かな宮島の一角。大下家は仲の良い五人家族です。家長の文太さんをはじめ、毎日せっせと働く働き者ばかりでした。文太さんは朝早くから漁に出かけ、妻の花子さんは庭に小さな畑をつくり、長女のいい子は近くの新聞社に出かけ、長男のもんじゃと次女のかよは学校から帰ると魚を干したり畑の手伝をしたりして、五人で力を合わせて暮らしていました。
ある日のこと、文太さんは珍しく大漁で、とても満足して引き上げようと帰る仕度をしていました。その日の獲物はアユ、ハマチにマグロ、そして紅鮭が八尾とコイが五尾でした。

「今日はすげえ大漁じゃね。皆喜ぶにちげえねえ。このマグロをすぱっとおろして、花子のつくった大根添えて、それにキュッと一杯ありゃあ、そりゃあ最高っちゃあねー。」
と文太さんはホクホク顔でした。そしてふと上を見上げると、頭上にはいつものことながらもみじの紅葉が一面に広がっています。文太さんは今日のこの収獲を誰かに拝みたくなりました。
「そうじゃ、海の神様に恵みをくれてありがてえって感謝せんとね。」
と、文太さんは何を思ったか、もみじの葉を一枚取り、水面に流しました。するとどうでしょう、葉はみるみる水中に沈んでいき、中からにぶい声で、
「真っ赤だな、真っ赤だな、オコゼのお腹は真っ赤だな。もみじの葉っぱも真っ赤だな。」
と、歌声がきこえてきます。そして、小さな重箱がポッコリ浮いてきました。文太さんは驚いてその重箱を手に取ってふたを開けてみました。するとそこには、先ほど流した葉と同じように赤く、もみじの形をしたおいしそうなおまんじゅうが一つ入っていました。
「うっひゃあー、たまげたね、こりゃあー。」
文太さんがあまりにも大声をあげたので、学校から帰る途中のもんじゃとかよが走ってきました。
「父ちゃん、どうしたの？」
二人がのぞくと、まあ、おいしそうなおまんじゅう。文太は起こった事を説明し、今度はもみじを二枚流してみました。すると今度は、
「真っ赤だな、真っ赤だな、タコの足は真っ赤だな。もみじの葉っぱも真っ赤だな。」
と、低い声で歌がきこえてきたかと思うと、また重箱がポッコリ浮かんできました。開けてみると、今度はおまんじゅうが二つ入っています。三人はそれぞれ一つずつ食べてみました。そのおまんじゅうのおいしいことといったら、中のあんこのとろけるような甘さが口の中いっぱいに広がってきます。そこへちょうど仕事から帰る途中のいい子が通りかかりました。そして事情を説明し、今度は三枚流してみました。すると、
「真っ赤だな、真っ赤だな、金魚の尾びれは真っ赤だな。もみじの葉っぱも真っ赤だな。」
と、今度はかわいらしい歌声がきこえてきたかと思うと、重箱がポッコリ。開けてみると三つのおまんじゅうが入っています。
「ねぇ、お父さん、この親切な海の神様にお礼を申し上げましょう。」
と、いい子がにっこりと言いましたので、四人は声をそろえて、
「海の神様、海の神様、たくさんの魚をつかーさった上に、こんなおいしいおまんじゅうをありがとうごぜえます。」
と、海に向かって叫びました。すると、水面にポコッと三つの頭が浮かび、こう言いました。
「文太さん、あんたとこの家族はいつも皆働き者じゃけえ、

今日はいっぱい魚とらせてやった。そのお礼にきれいなもみじをありがとな。わしらー、このもみじをつこうて〝もみじまんじゅう〟いうもんつくってみたんじゃ。またこげーにいっぱいあるけぇ、持って帰ってくれ。」

と、文太さんの両手いっぱいに広げたぐらいの重箱をデーンと置いて、また海の底に沈んでいった。四人はエッチラオッチラ重箱を運んで家に帰り、花子さんに説明してその重箱を開けてみました。すると、なんと百以上もあるもみじまんじゅうがたいそうきれいに並んでいました。

「そうだわ、せっかくいただいたこのもみじまんじゅうを、島の人達に広めてあげましょう。」

花子さんが言って、五人はその日からせっせと粉をねって小豆をたき、こんがり赤茶色のおいしいもみじまんじゅうを沢山つくり、島中に広めていきました。

これが有名な「名菓　もみじまんじゅう」の元祖ということです。おしまい。

二、作品①、②の分析・批評

(1)〈作品例①〉の場合

日本の昔話を、中世のヨーロッパの話とした点がユニークである。「おむすび　ころりん」ではおばあさんが登場したが、この作品では「年老いた一人暮らしのおじいさん」という設定にしている。おばあさんの代わりに「小鳥」が登場しているが、小鳥について表現されているのは、

Ⓐ「一羽の小鳥と楽しく生活していました」。

Ⓑ「小鳥と一緒にパンを食べていました」。

Ⓒ「部屋で小鳥がまっているからと言って」。

の三部分にすぎない。「おむすび　ころりん」での「おばあさん」の存在感を踏襲したわけであるが、「Ⓑ」の部分で小鳥の「おじいさんが好き」な様子がわかる具体的な表現が欲しい。

小道具については、「おむすび」の代わりに「パン」、「うちでのこづち」の代わりに「ステッキ」と、西洋のお話らしくなるように考えられている。

次に、ねずみの歌の部分であるが、「おむすび　ころりん」では、子どもの大好きな部分であり、聞いている子どもが歌い出すようなリズミカルな表現となっている。この作品の場合、その意図を十分に把握して作っている。特に、

パンがいっぱいパンパンパン
パンはおいしいパンパンパン

と、「が」と「は」の使い方について、自然に子どもの言語感覚に訴えかけられるような、対句表現にしている点、「パンパンパン」を名詞の「パン」の意義とともに、擬声語的にも使用し、リズミカルな表現にしている点がよく工夫されている。

最後に、お話のしめくくりの部分であるが、「それから後、おじいさんはお金持ちになりましたが、ネズミの穴の前にパンを置くこと

をずっと忘れませんでした」という、「おむすび　ころりん」には相当する部分のない一文を添えており、おじいさんの心優しい性格が、あたたかく伝わってくる透逸な表現となっている。

(2)〈作品例②〉の場合

時代を現代の大正元年に設定し、場所も有名な広島県宮島とし、人物にも氏名をつけ、年齢もある程度読み手にわかるようにしている。「昔々、あるところに、おじいさんとおばあさんがいました」という昔話特有の冒頭表現を逆用し、現代的ムードの濃い作品にしている。

登場人物も多く、ストーリーも長めで、作者も「対象は小学生中学年以上」と考えている。

構成は、起承転結を意図していることがうかがわれるが、意図的な改行のなされていない部分が多く、場面の転換が不鮮明になっている。

全体的に、軽い笑いを起こさせる表現が多く、挙げてみると、

一、大下文太（だいしたもんた）・大下もんじゃ・いい子など、しゃれめいた氏名のつけ方。
二、方言の使用
三、「まっ赤な秋」のかえ歌の挿入
四、オコゼ・タコという、ユーモラスな生き物の登場
五、宮島の海で「アユ、ハマチ、マグロ、紅鮭、コイ」が捕れ、「オコゼ、タコ、金魚」が登場するという、非現実的な点。
六、広島の名菓もみじまんじゅうのできた由来の話である、というおち。

などが指摘できる。

この明るい表現を支える土台として、家族の団結、神への感謝、友愛という主題がはっきりと看取され、健康的なイメージの作品となっている。

反省と今後の課題

まず、今回の創作を体験した学生の感想を、次に示したい。

① 私は、空想するのが好きで、自分でいろいろな話を考えたりします。前も、とても短いけれど話を書いたこともあるので、この創作はとても興味があったし、楽しくできました。でも、もっと人が思いつかないような発想ができればよかったなと思いました。

② 一つの昔話を土台として、自分なりに昔話が作れたことはうれしかった。また、他の人の作品を読み、一つの話を土台としたとはおもえないほど、人さまざまなおはなしができあがっていたことにはおどろいた。

③ 一人で作るには少し苦痛を感じていました。けれど、昔話を土台とすることで、自分にもできるのだ、という自信がついて良かったと思います。

④ 絶対時間がかかるだろうと思っていたけど、案外話がすらす

らと出てきて、わずかの時間で書くことができました。本業の人たちのような話はとてもできないけど、それらしい作品にしあがったのではないかなあと自分では思っています。

⑤ 作る前は創作なんかできないと思っていたが、簡単な昔話を土台にして考えると、とても作りやすかった。どんどんと頭の中に文が浮かんでくる感じで、作家になった気分だった。

以上のような、創作体験を楽しみ、自分の作品にもある程度満足したという感想が大半であったが、中に、

⑥ なかなか話の筋がまとまらなくて困りました。何度も書き直しました。結局、あまりいいものができなくて残念でした。今度創るときはもっといいものをかきたいです。

⑦ 難しかった。どうしても土台の物語が頭から離れず、ちょっとこだわりすぎたかなあと思った。もう少し想像力を働かせて、違う感じのおはなしにした方が楽しかったかなあと思った。みんなはいろいろな話をかいていておもしろかった。

という反省も見られた。自分の作品については不満足であるが、⑥の学生の場合「今度創るときはもっといいものを」という意欲は見られる。⑦の学生の場合も、友人の作品を読んで刺激を受けた結果の自己反省であり、今後の創作活動にはプラスになると思われる。

今回の試みは、特に、「書く」ことに対する苦手意識をもつ学生に、取り組みやすくしたいというのが一つのねらいにあった。この点については、ある程度は達成でき、創作の楽しみ、他の人の作品を読む楽しみが味わえたのではないかと思う。一つの昔話を土台として、十人十色の新たなお話が生まれたことに対する驚きは、学生の創作の興味や意欲を抱かせたようである。さらに、一人一人の個性が、このような短い文章にも表れており、自己発見・友人の個性発見の契機にもなった。

問題点は、ある程度長さのある文章創作であったために、細かな表現の推敲の指導にまで至れなかったことである。

今後の課題は、日本語の言葉そのものの面白さ・美しさに気づき、十分に味わいつつ表現できるようになることを目指し、児童詩程度の短い表現を扱うことにより、表現の推敲の仕方を細かく指導し、学生の自己批正能力を養っていくことである。

注① 本吉圓子著、萌文書林　一九九一年九月七日

（引用・参考文献）

本吉圓子『子どもの育ちと保育者のかかわり』　萌文書林　一九九一年九月七日
相馬和子他『お話とその魅力』　萌文書林　一九八九年十月五日
堀尾青史『保育童話Ⅰ　お話づくり（保育のアイデア㉗）』童心社　一九七七年十二月二十五日
村上幸雄編『保育童話Ⅱ　春、夏、秋、冬お話集（保育のアイデア㉘）』童心社　一九七九年十二月二十五日

（平成五年十一月十七日受理）